

意に多い。各種肝機能検査ではグロス値高田反應馬尿酸合成試験が高率に陽性であり尿血清中ウロビリネン増加と関連する。又自律神経機能試験、2, 3アレルギー現象に関する試験は共に有意に陽性である。以上簡単に「冷え症」のアウトラインを報告した。

誌上発表

(I) 哺乳動物の周期的性器出血と排卵

(東大分院) 加藤 一男

哺乳類で周期的性器出血、即ち月経、季節経、又は年経のある動物には、ひと、猿のみならず犬、羊、山羊、その他種々あるが、一般に季節経、年経等の周期的性器出血終了後に排卵が行われる。即ち出血の第1日より算えて10~14日目でその時期が交配の時期であり、此の時期以外では生殖は行われない。

ひとの場合には周期的性器出血と排卵が2週間毎に交互に繰返されるので、統計的観察は困難であるが、人でも犬でも、卵胞ホルモンにより出血を起し得る事、即ち卵胞ホルモンはホルモン性子宮出血剤であり、又初潮が無排卵性月経と云われる事や、胎児の在胎日数が性器出血の周期にかゝらず280日前後である事から、哺乳類全般を通じて、周期的性器出血は、交接、受胎、妊娠等の生殖諸現象の前準備であり、性器出血は排卵に先行するとの生物学的法則を樹てるに至った。

(2) 月経症に与えたグルクロン酸の効果と其の暗示(第1報)

(東京・明石病院) 街風喜雄, 高橋 望

ステロイドホルモンの代謝とグルクロン酸抱合の問題は未だ十分明らかでない。我々は所謂月経困難症乃至緊張症に対し、従来の性ホルモン投與を行わずに、グルクロン酸投與のみで、其の推移を観察し、26例の好結果を見た。グルクロン酸の月経症に示した好成績例の報告は之まで餘り聞かない。対象としては、月経時の下腹痛、頭痛、嘔吐等の苦痛により臥床又は欠勤する者、疼痛時に鎮痛剤を要した者、之までホルモン治療によつて軽快しなかつた者を撰んだ。投與は、市販のグロンサンを1日300mg乃至600mg経口的に與えた。此の結果、月経時に臥床、欠勤をせずに済み、苦痛の消失軽減して正常の如く働けた者は、内服を月経後早くから始めて続けた者又は月経前10日以上から服用した者に多く、月経前5日からでは効果が少いか、無かつた。以上の好結果に対する解釋は俄かに與えられないが、グルクロン酸のステロイドホルモン代謝に及ぼす役割はこれまで考えられた以上のものがあることを暗示し真に興味深い。その本態を探ると共に、職場・学校等に於ける本症例につき更に観察を續けている。

第3群 ホルモンに関する問題(I)

1. 尿中プレグナンジオールの定量法に就いて(第2報)

(大阪府・市立豊中) 井上一正, 鈴木俊作

妊娠並びに非妊時の黄体機能を知る爲に、尿中に排泄されたプレグナンジオール(以下PGと記す)を定量することは、臨床的なプロゲステロン定量法の確立されていない現在極めて重要なことである。1936年、Venning等が始めてPGグルクロニデートの定量法を発表してから、Astwood, Talbot, Allen, Mackその他の人々によつてPG定量法は種々改良され簡易化されて来たが現在も、より正確な又より簡単な定量法とするべく多くの人々によつて研究されている。私共も簡易化の方向に重点を置いて実験を行い、若干の興味ある成績を得たので先の第9回総会に引き続き報告する。

定量法は尿を加水分解した後クロロホルムでPGを抽出し、クロロホルム層をアルカリ洗滌してエストロゲンを除き、次いで稀釋した硫酸と振盪してPGを硫酸層に

移し、この硫酸層を加温してPG発色を比色する方法で、全定量操作を略々1時間で終了し得る。

アルカリ処理によつて比色定量法の最も難点とされる尿色素が殆んど溶媒に移行しない事、又クロロホルムで酸性、中性及びアルカリ性溶解の何れからでも容易に且つ定量的にPGを抽出出来ることは先に報告したが、クロロホルム中のPGはアルカリ洗滌によつて殆んど影響を受けないが、エストリオールも又アルカリ洗滌では完全に除きにくいようである。ただクロロホルム層を80%硫酸と振盪し、クロロホルム中のステロイドを硫酸層に移して50~70°Cで5分間加温した場合、エストリオール、コレステロールは殆んど現色なく、又17-KS(DIAS)は対照の発色と変化しないから、私共の検討した範囲ではPG、エストラジオール、17-OHコーチゾンが吸光度を増加するだけであつた。

クロロホルム中のPGは80%硫酸によつても略々定量的に硫酸層に移行するがPG濃度が大となる程移行度が